

中学校公民的分野「人間社会と家族」の授業（Ⅱ）

—— 授業の具体的展開とその検討 ——

今谷順重*・安部 登**・安立 良**・曾田満子**

Nobushige IMATANI, Noboru ABE, Ryō ADACHI and Mituko SODA

Planning The Lesson of “Human Society and Family” in Secondary Social Studies Part II

—The Practice of the Lesson Plan and Its Conclusion—

I はじめに

本小論は、先の「家族生活」小単元①「人間社会と家族」の内容構成についての続編である。前編では紙数の関係で、前半3時間分の授業案と資料しか掲載することができなかった。したがってここではまず、後半3時間の学習内容の構成について概略を説明した後、具体的な授業展開過程と学習後の生徒の認識の変化や感想について検討を行なうことにしたい。後半の3時間は、前半における人間の社会的本性についての学習をふまえて、家族はわれわれのどのような欲求をどのような形で満たしてくれているのかつまりわれわれにとって家族とはどのような意味で基礎的な社会集団であるのかという家族の本質にせまっていこうとする。

まず第1時間目では、ヨーロッパやアメリカの家庭のしつけの具体例として、子どもたちは小さいときから自分の家の経済について詳しく教えられ、自分のこづかいが家族の全収入の中でどれくらいの割合をしめているか、もしそれをふやすと他の出費にどのような影響をおよぼすかといったことを実に詳しく説明することができること、また工場の技師の家庭でも郵便配達員の家庭でも父親は、自分の働いている姿を積極的に子どもに見せ、自分の仕事がいかに世の中の役に立つ素晴らしい仕事であるかを自信と情熱をもって子どもたちに話して聞かせるといったエピソードが提示される。このようにアメリカやヨーロッパの家庭では、親と子の間でとりきめられた暮しのルールにもとづいて、早い時期から自主独立のためのしつけつまり働いて食うことの意義とそのためになさざまな社会的規則や物の見方考え方を教えこまれるわけである。つぎに、このように一人前の人間として生きていくことについて非常に積極的なしつけがおこなわれる外国の家庭と対比しながら、生徒たち自身の家庭の場合はどうであるか、たとえばわたしの家ではこういうことに関してだけは親が非常にきびしくやかましいといったいわばしつけに関する家風とでもいえるべきものがあるか、自分たちは人間としての生き方についてどのようなことを親から教えられ学びとっているかと

いったような自分たち自身の経験について話しあわれる。生徒は自分たち自身の家族生活を外国の事例と対比しながらもう一度よくみつめ直して見ている中で、日本の家庭の場合、しつけの前提となる条件や考え方がかなり異っており、親と子の心理的な相互依存関係が深くその方法は論理的というよりむしろ情緒的であり、ややあいまいでいきあたりばったり式の傾向があること、そのために時折トラブルがおこることもさげられないが日本のしつけもそれなりにうまくいっているのではないかという結論に到達する。そしてこれらの議論を通じて、家族にはひとつの普遍的機能として子どもの人格を形成し一人立ちできる人間へと成長させていく作用があることが明らかにされるのである。

つぎに授業は、家族のもつ教育的機能もただこれだけが独立して存在しているのではなく、他のいくつかの家族の機能によって支えられ助けられて成立しているものであることへの理解へと発展してゆく。第2時間目では、この教育作用を背後から支えているもうひとつの重要な機能としての愛情と尊敬の念にもとづいた親と子の信頼関係についてとりあつかう。この問題を考えるさいの手がかりは、先にもあげた狼に育てられた少女についてのエピソードである。少女たちを発見したシング牧師夫妻は自分たちの経営する孤児院でふたりを育てるが、最初の約1年間にはげしい抵抗にあい、心と心の結びつきはもちろん人間らしい生活の仕方をなにひとつ身につけさせることができなかった。それは一体なぜだろうかということの追求がこの時間のテーマである。シング牧師夫妻はこの原因を1年間の悪戦苦闘の末にやっと知ることができた。この点についてつぎのように述べている。「人間らしい生活の本質は愛情以外の何ものでもない。狼っ子たちは、乳幼児期から母狼の中に見い出してきたのと同じ愛情を探しもとめた。しかしはじめのうちは私たちが信頼できず、私たちがこの子らに愛情をもっているかどうか確信できないでいた。この結果が少女たちの中に眠っていた人間的な成長の発達を遅らせたのである。人としてこれから成長するための道を開くのは、母親の愛と親切である。子どもたちは母親が自分を愛してくれているのを知っているから、母親に盲目的に従うし母親を信頼できるのだ」。ここにみごとに示されてい

* 島根大学教育学部社会科研究室

** 島根大学教育学部附属中学校

るように、子どもの人格の形成という家庭の重要な仕事は、愛情と信頼にもとづいた親と子の強い結びつきがあってはじめて可能となるのである。このような視点をふまえて生徒たちは、もう一度自分たちの家族生活を見つめなおし、親のありがたさをどういう時に強く感じたかなど、自分たち自身の経験について話し合う。そして、子どもは家庭で保護され育てられ無意識に親を見習って一人前になっていくわけであるが、もし親と子の信頼関係が欠けていたり不十分なときには、親のしつけが子どもに強制されているという感じを与え、とげとげしい雰囲気になって親に反抗的になったり非行に走る原因になったりすること、親と子が人間的な愛情で結ばれ、家族員の織りなすさまざまな人間関係を子ども自身が好ましいと評価していればこそ、それを抵抗感もなく自発的に習得することが可能になることなどに気づくことができるのである。

第3時間目では、子どもの人格の形成は、このような精神的な側面の他に、家族の中での物質的経済的な保護があってはじめて可能となることがとりあつかわれる。家族は、自分だけの力ではまだ一人立ちしていくことのできない子どもに、親が無条件で衣食住の保証を与えるための経済的単位でもある。非常にきびしい自然環境の中で生活しているエスキモーは、われわれのように安定した条件の中で生活しているものよりもこうした家族の機能を一層明確に反映している。父親がつくる雪の保温力をうまく利用した雪洞式テント、ビタミン不足をおぎなうためにアザラシやトナカイの生肉を食べ家族全員がそろって食べることもなければ食事時間も決まっていなが比較的豊かな食生活、一家の主婦が自分の手と口で直接動物の皮をなめして作るアティギとアノガジュというすぐれた防寒性と防湿性をもつ衣類など、エスキモーの家族は、人々が生きていくための経済的欲求を満たす最小のまとまりとしてきびしい自然環境の中に存在しているわけである。このような観点をふまえてつぎに、生徒たち自身の家族ではどのようにして家族員の経済的欲求が満たされているか、たとえば家の中での仕事分担はどういうふうにおこなわれているか、もし一家をささえているお父さんの収入がなくなったらどうなるかなどわれわれがふだん何とも感じていない家族内での経済活動の生活的意味をあらためて討議の対象にすえるわけである。

これまでに見てきたように、後半の3時間では子どもの人格形成の作用を中心にそれを支える親と子の信頼関係および物質的経済的な保護といった3つの機能の相互関連という観点から家族の本質が言及される。そして最後に、6時間の全授業をもう一度家族の本質をとらえるための大きな探究の流れとしてふりかえる中で、実は家族とは、もし生まれたままの状態のまま放置されれ

ば死んでしまうかもしれない非常に無力な一個の生物学的有機体として生まれてきたわれわれを、種々の人間的能力をそなえた他の動物よりもはるかに生命力のたくましい自立的存在につくりかえるために長い期間にわたって精神的物質的援助を与えてくれる、われわれがこの世に生をうけてまず最初にでくわす素晴らしい仲間であることを理解させようとするのである。そしてさらにこの小単元①は、われわれにとってこれだけ重要な意義をもつ家族生活が、戦前から戦後へと制度的および理念的にどのような変化をとげてきたか、現在どのような問題に直面しているか、それらの問題はどのようにして解決していくことができるかという形で、小単元②③へと発展していくわけである。

このように前半の3時間が比較種族的な観点から、他の動物の特性と対比させることによって人間の社会的本性をうきぼりにしてみせたのに対して、後半の3時間では、比較文化的な方法を効果的に使用することによって日常化された家族生活をとらえ直すための新鮮な視点を作り出そうとしている。もちろん異った文化との比較は決してめずらしい事象へのいたづらな好奇心の刺激や、生徒たち自身には関係のない単なるよそごととの比較として終らせるのではなく、あくまでも自分たち自身の家族生活をより新しく深い観点からもう一度みつめ直してみるためのきっかけをつかむ手段として位置づけられていることはいうまでもない。現行学習指導要領における家族生活についての学習では、学校や会社、政党など人為的につくられた機能的集団との比較によって家族独自の機能をとらえさせるというきわめて平板な内容構成になっている。それに対してここに示した新しい内容構成は、社会的存在としての人間の本性というかなり高度な抽象的概念を、具体的な資料をふまえて生徒にわかりやすく理解させることを可能にしていると同時に、家族の意義と役割についても生徒の日常的認識を一步前進させることを可能にしているといえよう。ここでは紙数の関係で、残念ながら後半3時間についての学習指導案と授業資料の掲載を省略せざるをえない^①。

Ⅱ 授業の具体的展開

われわれはこれまでに述べてきたような内容構成論にもとづき6時間の学習指導案と授業資料を作成した後、以下の日程で島根大学教育学部附属中学校3年生の4クラスにおいて実験授業をおこなった。

曾田教諭	3年1組	S.52.6.29～7.9
〃	3年2組	S.52.6.13～6.28
今谷講師	3年3組	S.52.6.29～7.9
〃	3年4組	S.52.6.21～6.29

以下はそのうちの前半3時間の授業記録である。

授業の実際

第1時 授業者 今谷順重 3年3組 昭和52年6月29日

T1 これから何時間かにわたって、人間社会と家族ということについて考えていきたいと思えます。実際われわれにとって家族というのはどういう役割とか意義をもっているのだろうかということですね。まあ家族というのは、われわれが生まれてきたときから自分たちの周囲にあって、いってみればそれは空気のようなものであるということですが、あまりにも身近でありすぎるために、一体家族とは何だろうかということをつきつめて考えることが少ない、また考えてみても案外とらえにくい、わかりにくいものであるということです。まあ自分自身というものがなかなかわからないようにですね、非常に身近なものというのは案外わかりにくいものなんですね。そういう意味でこれから何時間かの時間をかけて、いろんな資料をふまえながらじっくりと考えていきたいと思えます。

それで今日は、まず最初に、家族のものにはいるまえに、その前段階といえますかそういうことを少し考えてみたいと思えます。今から人間の赤ちゃんについてのスライドとさるの赤ちゃんについてのスライドを見せます。このスライドを見ながら、人間の赤ちゃんときるの赤ちゃんというのは一体どこにどういう違いがあるのかということを考えて、後で発表してもらいますからそのつもりで見て下さいね。(スライド1) これは、人間の赤ちゃんが生まれた瞬間の写真ですね。右の小さなところには、うぶ湯をつかっている赤ちゃんがいます。それからこれはさかきにつらあげているわけですけど、医者か口の中につまった汚物といえますか、産道を出てくるときに口の中に入れておられるかというところで、それを放っておくと窒息してしまいますので、それをすぐにとりだして息ができるようにしているんですね。これをとりますと、オギャーという元気のいい声がでるわけですね。

(スライド2) これは5つ子の赤ちゃんです。左側から長男から5番目の子までいるんです。未熟児に近いわけこれは保育器の中での写真です。(スライド3) これは外国の赤ちゃんとお母さんの写真ですが、これもうまれて2週間くらいは感じですが、お母さんが非常に愛情深くといえますかやさしく注意をくばりながら、こわれものをだくようにしている。赤ちゃんは眠っているようです。こういうところから、人間の赤ちゃんはどういう特色があるかということですね。

(スライド4) これは5つ子の赤ちゃんが100日後、3ヶ月ちょっとたった時の写真です。前よりはだいぶ元気になっています。さるの赤ちゃんの3ヶ月くらいたったのとはどうであろうか。その比較の資料としてここにだしたわけです。(スライド5) これは、保育園でお母さんが赤ちゃんの世話をしているところですね。今おむつをとらえているところです。人間の赤ちゃんの場合はだれかが世話をしてやらないと十分生きていく、成長していくことができない。だれかの助けが必要であるといったようなところがあるんじゃないかと思うんですが。

(スライド6) ハイ、つぎはさるの赤ちゃん。これはさるの赤ちゃんでヒヒという動物です。これはうまれてまもないころで、お母さんのおっぱいのところにつかまっています。さっきそういう人間のお母さんと赤ちゃんがいましたが、どういうちがいがあるか考えてみて下さい。(スライド6) これは同じくヒヒの赤ちゃんがうまれて3、4ヶ月たったときですね。この時は母親のお腹の毛にさかきにしっかりとつかまっているわけです。(スライド7) これはさっきのヒヒの赤ちゃんが、あれから2、3週間たちますとお腹につかまっていたのをやめて、背中につかまるようになってくるんですね。ところが、これはまだ十分うまくつかまることができなくて、お母さんのおしりの上に両手両足しっかりとつかまっているというところですね。(スライド8) そしてこれが5ヶ月目くらい。この時になりますとヒヒの赤ちゃんは、完全に足だけでお母さんの背中に体を固定して手は自由に、これは蓋ですね、えきを食べています。母親が走りだすとふりおとされるといけなから両手でパツとしがみつかわけてです。

(スライド9) これは同じく5、6ヶ月のヒヒの赤ちゃんと考えているんですが、お母さんが子どもに関係なくセッセとえきを食べているんです。さるの赤ちゃんの場合は、お母さんがおっぱいはくれるんですけどもそれ以外の食べ物はいくれない。自分自身の力で見つけて食べなくてはならない。ここでは、さるの赤ちゃんが自分にもくれと手をだしているけれどもお母さんはそれを無視して自分だけ食べている。(スライド10) これは2才になったときのヒヒの赤ちゃん。これは野火という自然におこる山火事で焼けた野原で、自分の食べ物になる木の芽をさがしているという姿です。もう2才になりますと赤ん坊時代というのは完全に終わります、何でも自分でやっていたいかなければならない。これからは、さるの社会の中で自分の地位というもの

を自分の力で切り開いていかなければならない。そういう時点にもう到達しているわけですね。そういう意味で、さるの赤ちゃんにとって将来の自分を自分で決定していくというかきずいていかなければならない大切な時期にさしかかっていることがわかります。(スライド11) これはヒヒとちがうているが2才以上になりますと完全に自分の体を自由に使って、木と木の間をつな渡りしている手長ざるの写真です。もう体も一人前であるということです。

それでですね、今、人間の赤ちゃんときるの赤ちゃんのうまれてからしばらくの様子というものを覚えてもらって下さいけれども、人間の赤ちゃんときるの赤ちゃんにはどう違うかあるかと思えますか。ハイ、この列。

- P1 先生もさっきいわれたんですけど、人間はある一定の時期までは親の手をかりて、さるもはじめの方は同じですけど、その時期が長くて他の人にたよって生きていかななくてはならないけれども、さるとカチンパンジーとかははじめのうまれた時だけで、後は自分の力で生きていかなければならない、そういう違いがあるんじゃないかと思えます。
- P2 さるは成長がはやくて、2才になるともう自分の地位を切りひらくといわれましたけど、成長するのが早いと思えます。
- T2 そう、成長するのが早いね、後ろの人どうですか。
- P3 さるっていうのはうまれてからすくしの時間は親の力をかりるんですけども、すぐもう自立して自分一人の力で生きていくんですけども、人間というのはやはり親の力をかりて社会の力をかりて生きていく。
- T3 うしろ。
- P4 だいたいうまれたときは同じですけど、さるは2才で自立して成長するのが早いということ、それから人間の手は親の手をかりなければ生きていけない。
- P5 さるの母親が自分だけえきを食べていて子どもがそれをほしがってやらないという場面があったんですけど、それを見て、人間は親の手をかりて育ててゆくということから人間の親はさるの親に比べて子どもに甘いという感じがしました。
- P6 人間ときるの環境や境遇なんかもあわせて、まとめてそういう風な意見が続いていると思うけど、さるの場合は自然と戦って生きていかななくてはならない、その面でも自分の食べ物をとっていかないやいけないうこと。人間の場合は、家族を通してみるとお父さん、お母さんがいて、自分という存在があって、兄弟があって、1つの家族の集団の中で生きていくだけけれども、さるの場合は、自然の中で1人で戦って生きていくという感じがしました。
- T5 さるは非常にきびしい自然の中でたくましく、ある意味ではお母さんなんかの力をかりずに生きていくという、自分でやっていくということ。それに対して人間の場合は、ややお母さんが子どもに手をかけてすくし甘いところがあるんじゃないか、そういう意見ができました。それでですね、どういう違いがあるかということをいろんな資料でみていくわけですが、その仮説というか予測としてある程度まとめておくとすると1つはそういうことですかね。人間は非常に親の手をかりるのに対してさるというのは自分の力で生きていくという、そういうところがだいたい共通しているんですが、それでは実際にどう違うかあるかということ、さっきの資料で見てみたいと思えます。資料の「さるの赤ちゃん」のところをさきみ読んで下さい。
- P7 「さるの赤ちゃん」の資料を読み。
- T6 ハイ、今読んでもらったところで、さるの赤ちゃんのどういう特色が書いてありましたか。福岡さん。
- P8 さるのお母さんはさっきのスライドでもみたように自分のことしかしないんですけど、さるの子どもはお母さんが食事をしているときも、にげだしたときでもじつとつかまっています。それは自分以外に頼れるものはないから、生きようという信念で母親にしがみついているのだと思います。
- T7 ハイ、お母さんはえきを食べるのに一生懸命になっていて子どものことをあまりかまわないということですね。それでさるの赤ちゃんの場合は、さっきスライドにもありましたように強い力でつかまえる能力がある。お母さんにつかまえる能力を、生まれてまもない赤ちゃんが持っているということですね。お母さんがえきをとったり敵から逃げたりするために猛スピードで走って、絶対にふりおとされないという手のしがみつく力を生まれつきもっているということ。もしふりおとされれば即死はまぬがれないだろうと書いてありますね。それとよく似たもうひとつの例として、動物がうまれつきでれくらく大きな力もっているかというのと同じくして、もうひとつ、上に「かもめのひなの行動の発達」という資料がありますね。このところを後ろの人読んで下さい。
- P9 「かもめのひなの行動の発達」を読み。
- T8 ここにはかもめのひなのというのが、うまれてからどういふうな過

- 程で成長してゆくかということが、かなり詳しく書いてあるんですが、まずかめめひなの行動の発達で非常に特徴のあるところというのは、どういうところでしょうか。須藤くん。
- P10 さっきも言われたように、だれにも教わらなくてもかめめの母親が警戒声を出せば、そういう機敏な行動をとったりするということがあって、人間の場合は何も教育せずに箱の中に入れておいたら、危険だって教えても逃げないと思うから、やっぱり回りのものが敵というのと回りが安全な中で育てられた人間とではだいぶ違うと思います。
- T9 今かなり進んだところまで意見をいってもらいましたが、今言ってもらったようなことをもう少しこれから考えていくのですが、今かめめひながですね、どういう特徴があるかということをもう一回確かめておこうと思うんです。今言ってくれたことの中には、お母さんの警戒声ですね、おそれもしないのに岩かげにかくれたりすることができるそういう特徴がありますね。その他はどうでしょうか、ひなの行動で特に注目するところは、その横の人や動物などですか。
- P11 はじめは人間と同じように、お母さんに何か食べさせてもらっているんですけど、すぐ自分一人で食べられるようになる。人間の場合だったら2年くらいしなっか自分一人で食べたり、生きてゆくために自分がしなきゃいけないことさえできないんですけど、かめめひなの場合は2週間とかそこらでできるようになる。ですからその点がちがうかと思うんです。
- T10 ハイ、今言ってもらったようなこと、できるだけ資料にあった事実を指摘するような形で自分の意見を言って下さいね。となりの人どうですか。
- P12 生後4、5週間でもうしっかり飛べるようになる。
- T11 飛ぶということに関して4、5週間で飛べるようになる。そのためには1週間くらいたつともう羽をバタバタさせて、飛しよう運動をはじめます。そういう飛ぶということが非常に早くできるということですね。つまり体が一人前になるのが早いということ。それから一番最初に書いてありましたように、たまごの中から出てくるときに自分自身の手で殻を破って出てくるということ。それから2、3時間するともう羽がふわふわになってきて、ついに飛び運動、お母さんからえさをもらうために口ばしでお母さんの口ばしをつつく運動をはじめるといことですね。それから5時間くらいたつと、自分で何とかが立とうとするようになりまた立てようになるといこと、その日のうちには2、3歩歩くことができるようになる、そして2、3日たつとさっき言ったように警戒声によって何かの下にもぐりこむということですね。それから2週間たつと鳴き声をはたて見知らぬ相手に対して攻撃を加えるようになる、またこの頃になると自分でえさを食べることができるようになる。そういうふうなかなり詳しい事実が書いてあったと思うんですが、これらのことはさっきだれかが言ってくれたように、だれからもおそれなくても自分でできるようになるわけですね。こういう行動をどういうか知っていますか。君どうですか。だれからもおそれなくても生まれつきできるそういう力、どういいますかね。その後どうですか、わからない。
- P13 人間にもあるんですが、かめめひなのかめめの本能だと思います。
- T12 そうですね。本能的な行動とか生得的な行動とかそういう言葉で呼んでいます。つまり生まれながらにして自分の体の中にそういうふうな行動することができる力がみこまれているといえますか教わらなくてもそなわっているんですね。動物というのは今みてきたさるの赤ちゃんやかめめひなのように、生まれつきこういうほとんど完全武装とでもいっていい自分で生きていくために必要な非常に精巧なすぐれた本能的行動様式をもって生まれてきているということがいえるんですね。こういう本能的な行動というのを他に知っていますか、どうですか。
- P14 犬なんかでもはじめは原なんかを出す時、電柱に片足をあげてやるとかあいうのが本能だと思います。
- T13 まあ確かに自分の帰る道をおぼえるように印をつける、またはなわばりをつける、そういう作用をしている。その他にもう一人くらい聞いてみようかな。君なんかどうですか。
- T14 わかりませんか。まあいろんな例がこういう動物の本能的行動についてはあるわけで、たとえば蝶々なんかでも幼虫からかえって突然だれからも教わらないのに空中へ舞いあがる。またくも巣なんかでもだれからも教わらないのにもくも、生まれながらにすばらしいくもの巣をはることができる。それからわれわれと同じほ乳類なんかです。牛とか馬とかやぎとかあいう動物は、うまれるともう2、3時間するとすっかり自分で歩ける、立ち上がれるようになるわけですね。あれなんか、普通のほ乳類には肉食の動物と草食の動物がおりまして、牛や馬なんかは草食なんですけど、この動物たちは生まれつき肉食動物のえさにくまれてしまう危険性があるのと、長い進化の過程で生まれたらすぐに立って、親と一緒には逃げることができるようになる、そういう能力を身につけてきたんですね。それに対して犬なん

か、まあライオンとか虎なんかの肉食動物は、生まれてから歩けるようになるまでに3日から4日1週間くらいかかる。すぐには歩けるようにはならないんですね。まあそういう本能的行動というものを非常に完璧な形でこういう動物はもっているということですね。それに対して人間の赤ちゃんは一体どうなのかということ。そこで人間の赤ちゃんが一体他の動物と比べてどういう違いがあるかということをはっきりと確かめたいんですが、「新生児の心の発達」というところがあります、2の資料ですか。そこを読んでもらえますか。岩崎さん。

P15 「新生児の心の発達」を読む。

T15 ハイ、どうも。ここでは人間の赤ちゃんがうまれた時一体どういう特徴があるかということが書いてあるんですが、どういう特徴がありますか。片山君。

P16 人間というのはうまれて1ヶ月間はまだ脳細胞が眠った状態ですけど、さっきのかめめの場合は生まれてもう2、3時間するというばみをはじめ、もう2日目くらいには歩くようになる。人間っていうのは脳については発達しているけれども体全体としてはすごく劣っている。

T16 なるほど、となりの人。

P17 片山君と大体同じなんですけど、やはり脳の重さは25%だけれども体が6%というので、脳細胞は発達しているんですけど心というものが白紙状態である。

T17 どうも、いま赤ちゃん二人の人が言ってくれたと思うんですが、1つは非常に頭でっかちであるということ。見た外観ですね。ということは、人間の赤ちゃんの場合は脳が非常に発達した形でうまれてくる、脳細胞なんかもすでにちゃんと数が整ってあってですね、一生その数は変わらない。それから体内での栄養の補給が特に脳を中心におこなわれている。そういう点で人間の赤ちゃんは非常に脳の発育がよいということですね。それに対してそれ以外の体の方は非常に未発達といえますかまだ未熟な形であるということ、うまれても大部分は眠っているし、また目もほとんど見えない耳もほとんど聞こえないそういう状態である。したがって心の中、精神状態は白紙のようなものだと書いてありましたね。そういうふうな人間の場合はですね、体の能力から言えば1年間早く生まれすぎたさであるといわれているんですね。1年くらいたたないと自分で動いたりすることができない。そういう未熟な形で1年も早く早産してくるというような言い方がされているんです。それが今度は1ヶ月くらいたつとどのようになってしまうかということが次に書いてあるんですが、そこを読んでください、周藤さん。

P18 「心の発達」を読む。

T18 これは大体1ヶ月たった人間の赤ちゃんがどういうふうな成長していくかということですが、少しは進歩するわけですが、視力なんかも見えないに等しい、非常に近眼であるということですね。本当の意味である程度目が見えるようになってくるのは3、4ヶ月になってからであるということ。それから聴覚、耳の方も比較的早く発達するけれども1ヶ月では本当に聞こえるという状態にはなっていない。このようにさるかめめひなと人間の赤ちゃんがどういう様子かということ資料を見てきたんですが、今見てきたようなことから最初みんなが言ってくれたことをまとめるとどういふことが言えるでしょうか。大体みんなの予測が当たっていると思うんですが、それをもう一度まとめて言ってもらいます。できればここで使っていない言葉で言ってくれるといいんですが。安木君どうですか。

P19 あまりうまくまとめられないんですが、結局黒板に書いてあるようなことでもいいんじゃないかと思いますが。やっぱり人間の場合はうまれてからも母親というものをしたような感じで、本能はさるなんかなの方がすぐれているわけなんですけど、だから人間は親を頼っていくということで、それに比べてさるは自然の中で、自分の本能で生きていくために必要なものを自分から身につけていく、そういうことじゃないんでしょうか。

T19 大体よくまとめてくれたと思いますが隣りの人。

P20 人間について主に言うんですけど、人間は他人のせわが一番大切じゃないかということ、生まれたばかりの赤ちゃんを放っておくと赤ちゃんを殺すというか死の方へ持っていくことになるんですけど、人間の場合はそばにいて人がいて、それが人間社会の家族っていうものじゃないかと思えます。

T20 家族というところまで言ってくれましたけど、二人の意見をまとめてみますと、人間というのは他の動物に比べて本能的行動様式をほとんどもっていない状態であられることになって、自分自身の力で環境に適応していくといえますか、その中でうまく生きていくことができない。必ず親の助けが必要である、そういう点で非常に他の動物よりも弱い存在であるということですね。さるの赤ちゃんなんかは逆に非常に強たく生命力のうようなもの、いざとなったら自分でも生きていける力をもっているのに対して、人間はそういうことがぜん

ぜんでできない。そういうひ弱さをもった存在であるということが言えるんじゃないかと思うんですね。それからもうひとつの資料の「長い時間を費して成熟する」という表ですね。これをみてもらいますと、さるは大体1年間て赤ちゃんの時代を終わと書いてありますね。そして3才半で性的な成熟、肉体的に一人前になっていくということですね。そして8才で社会的成熟、全く大人とかわからない社会集団の中で一人前の大人として活動している場合、精神的に大人になるということですが、それに対して人間の場を見てみますと、大抵8才で一応赤ん坊の時代が終わる。それから14才で肉体的に大人に近い状態になり、18才で社会的に成熟する。この表から人間の赤ちゃんの特色として、弱さと同時にもうひとつ言えることがあるんですが、一番最初の予備にもできてきたことですがどうということでしょうか。江崎君。

P21 成長がおそい。

T21 成長がおそいということをもう少し言いかえるとうですか。横の人。

P22 それだけ一人前になるまでに時間がかかるということですから、さるなんかよりも相当高度なものを身につけることができるということではないでしょうか。

T22 高度なものを身につけていくことができる。これも非常にいいことを言ってくれたのですが、それをこれからまたいろいろみていくんです。それでここでは弱さと同時にですね、人間の場合は成熟するのに非常に長い期間を必要とするということですね。まあ成長がおそいということです。人間の赤ちゃんの特色は、非常にひ弱な存在であるとともに成長していくための時間が長くなる、その間親の保護を必要とするという特色があるということですね。そういうことをこの時間は理解してはしなかったんです。

第2時 授業者 今谷順重 3年3組 昭和52年6月30日

T1 前の時間は、さるの赤ちゃんなんか比べて人間の赤ちゃんは、生まれてきた状態が弱々しい無力であるということですね、同時に無力さという状態をぬけていく期間が人間の場合は非常に長くかかる、その間は親の保護がないと生きていくことができない、そういう人間の赤ちゃんのもつ弱さを理解してはしなかったんですが、今日はそれをふまえてさらに、人間のもうひとつの特徴について考えていきたいと思います。それで人間のもうひとつの特徴を言い表わす言葉として、「人間は万物の霊長である」というのがあるんですね。霊長というのはどういう意味かといいますと、非常に不思議な力をもった優れたものといえますか非常に優秀な力をもった万物の頭ということなんですが、あのように人間が弱いという特色があるにもかかわらず、万物の霊長といった非常に優れた存在であるといわれるのはなぜでしょうか。その原因を少し考えてみて下さい。どうですか。

P1 プリントなどを見ると……。

T2 今プリントはあまり見ないようにして下さい。後で……。

P2 道具を発明したりいろんなものを使ったりすることによって、身体なんかでは大きい動物もいるけれどそれに劣らないよううまく生活していけるということです。

T3 その後ろの人どうですか。

P3 青山君なんかと同じように書いたりしゃべったりすることができるし、それから歴史の始めに出てくるんですけど火を使ったり、そういう他の動物にはできないことができるから。

T4 その後ろの人。

P4 やっぱ道具を使ったりそれからものを考えたり今言われたようなことです。

T5 ハイ、その後ろどうですか、もう1人。

P5 今物事を考えるということができましたが、物を考えるにも深く正しく考えたり、それから動物と同じように集団がありますが、その集団も人間の場合と動物の場合とは違うと思います。

T6 集団が優れた集団であるということ？ハイその後ろどうですか。

P6 前の方に似てしまうんですが、そのことから道具を使ったり火を使ったりしてだんだん発達していった文化が生まれたりするから。

T7 文化という言葉ができましたが、今言ってくれたことは非常に大切なことで今日これから学習していくんですが、これらのことが本当に他の動物にはない優れた能力をもつことのできる最も根本的な原因だといえるでしょうか。もう少し前提となっているものがないでしょうか。君どうですか。これらは文化という言葉で呼んだらいいと思いますが、たとえばこういう道具をつくりだすためには何が優れていないとだめですか。

P7 他の動物に比べて知能が発達していて、脳が他の動物に比べて大きいことだと思います。

T8 脳の発達、知能が優れていないといけないということですね。それでは知能が発達しているだけで道具を作ることができますか。その後ろ。

P8 手を使ったり体のいろんな部分を使ったりして作ります。

T9 なるほど。このように人間の他の動物にはない優れた特色のひとつは、体の特徴、肉体的な特質、そこにまず大きな原因があるということが出来ます。こういう体の特徴をもとにしてさらに優れた文化というような高度な能力が生まれてくるわけですが、それでは今言ってくれた手を使うとか脳が発達するというためには、さらにもうひとつの他の動物にない特色がないといけないのですが、それはどうということだと思いますか。その後ろの人。

P9 あまりよくわからないのですが、注意深いというか自分のまわりをよく見るということ、そういうふう考えることだと思います。

T10 その後ろどうですか。

P10 他の動物などはつくるとのことより与えられたものを利用していうのか、たとえば与えられたものだけを食べるのに、人間の場合は物をつくりだしてやっていくということですか。

T11 自分でつくりだすね……。その後ろの人どうですか。

P11 似たようなことになるんですけど、きのう動物のところであったんですが、動物は本能で行動するのに人間は本能だけでなく、さきほど述べられたように自分のもっている能力で考えたりすることができる。

T12 考えるということは脳のことですが、さらにその前提となるのはどういふことか、これは大きい意味では、人間の体つきの特徴ということが出来るんですが、いってみれば簡単なことです。だれかわかりますか。だれかが言ってますけども大きな声で。ハイ、直立歩行ができるということですね。つまり手を自由につかたり脳が高度に発達してくる、さらにその原因となっているのは、人間が他の動物にはできない直立歩行ができたようになった。それが人間のいるんすばらしい能力の最も根本的な原因であるということができるわけです。

(スライド1) これは人間がどういふ過程をへて直立することができるようになってきたかということを表わす進化の過程を示した図ですが、最初はこのように背骨が直立していないということかたちと立っていない。ほとんど半直立で手も地面についているような状態です。それが背骨がだんだんまっすぐになってきて本当にまっすぐに立ててくるようになるわけですが……、(スライド2)さらにこういう過程を経てそしてこの1番右側が現生人類つまりわれわれの直接の祖先です。そのひとつてまえがクロマニヨン人でそのてまえがネアンデルタール人と呼ばれる人類の祖先なんです。人間がどういふ過程を通して直立することができるようになったかということですが、だれか知っていますか。ここは説明しましょうか。人間は一番最初のスライドにもあったように、最初のうちは非常に発育の不十分な体の小さな乳類で、同じ時代に生んでいた大きなは虫類なんかの間をこちょこちょと走りまわっていた、今でいえばきつねぎらやめがねぎらというようなその当時の姿をそのままとどめているような動物もいるわけですが、そういう動物だったわけです。ところがそういう小さな動物だから、大きな動物のいる所では安全性を確保することがむづかしい。そのためにそういう大きな動物が侵入してこない木の上で暮らすことを覚えるようになるわけです。ところが木の上というのは非常に不安定でへたをするのと下におちてしまふ。そのためには木にしっかりとしがみつことができないければならない。そういう中で人間の祖先は、前足が特に特殊化し枝をしっかりと握ることができるようになってくる。それと同時に、今までは前足も後ろ足も体重を支える役割をしていたわけですが、体を支え移動させるという機能は一方向的に後ろ足に任せられるようになってきて、前足は体を安定させたり枝を握んでバランスを保つという形で、後ろ足の任務と完全に切り離されて発達してくるわけです。後ろ足とちがって非常に自由に動くようになってくる。これが手が自由に使えるようになってくる進化の過程です。

同時に直立歩行というのはたど手が自由に使えるというだけではなくて、そういうブラブラゆれる枝の間を上手に移動しなければならぬわけですから、目を通して入ってくる刺激と手を通して入ってくるいろんな触覚、そういうものをすばやく調節して指令をくだしていく脳のはたらきが非常に発達してくるようになるわけです。これが人間が木の上での生活で得ることができた非常に優れた能力であって、それがやがて地上に降りてきて生活するようになってからもそのまま残ってさらにますます発達していく、そういう進化の過程をたどって直立歩行ができるようになったということが出来ます。それでですね、人間の体の優れた特徴としての直立歩行から可能になった手を使うことについてですが、人間の手にはどういふ優れた特色があるか知っていますか、体つきの点で。

P12 人間の手は親指が内側に向いていて、下等の動物になると親指も他の指と同じように真下に向いているのですが、人間の場合は物体を握るときに親指が相当横に向いてこのように内側からまわすことができるという利点があるわけです。

T13 なかなかすばらしいことを知っていますね。ひとつは人間の手とい

うものは、自分の手を見てもらったらよいと思いますが、親指が他の全部の指と向いた形でもつづくでしょう。(教師が自分の手で実際にやってみせ、生徒にもやらせてみる)ところが自分の足の指を考へてみると足の親指は他の指とけっしてくっつかないですね。ということは足では物を握れないが手では握れる。さらに鉛筆をもって字を書いたりいろんな複雑な道具をつくり出すことができる。そういうことについて今配った資料をみてほしいんですが、手の写真がありますね、対向する親指という所です。ここにはリスモドキというさっきいった人類の祖先の動物の手と人の手がありますが、リスモドキは親指と他の指がほとんど同じ形をしていますね。他の指とぜんぜんくっつくことができないということです。それから、こういうひとつの点ともうひとつは、人間が直立することができるようになった非常に大きな利点として、視点の高き視野の広さということがあるんですが、これはどういふことかわかりますか。君どうですか。

- P13 視野の広さというのは、目が左右に動いてまわりが広い範囲のところまで見わたせる。
- T14 なるほど、これについてもっと詳しく説明できる人いますか。視点の高さというのは、つまり人間がこうして四つんばいになって地面を歩いているよりも(机の上に教師が両手をつけて動物の姿をしてみせる)、こうして直立して見るようになった方が、たとえば地面に立って見ているのと東京タワーから見ているのと比べたらわかるように、非常に速くのがみわたせるようになりますね。それと同時に、四つ足の動物はこうやって歩きますから首があまり回らない、せいぜい前の方しか見ることができない。後ろはほとんど見えません。ところが人間はまっすぐ立っているからまっすぐと首を回すだけで後ろの方まで見ることができ。つまり視点の高さからくる視野の広さ、このことよって人間は非常に早く敵を発見したり捕えるえものを他の動物よりも早くみつけるという利点を獲得することができたわけです。これが直立歩行から出てくる第2の利点であり、第3番目はさっきもありませんように脳が非常に発達してくるということです。前の時間にも言いましたが、人間は1年間早く生まれすぎたきであるということですね。なぜ人間は1年間も早く早産しなければならぬのか、その理由を考えてみると、人間はあまりにも脳が他の体の部分よりも早く大きくなりすぎるために、他の体の部分が完全に完成してしまいうまれてすぐ歩けるような状態にまで他の部分がお母さんの体の中で成長するのをまっていたら、頭があまり大きくなりすぎて外に出られなくなってしまう、またお母さんの体が危険にさらされる。そういうことで頭だけがかなり完成した状態でまだ手足というものが非常に未発達な形で、他の動物より1年間も早くうまれてこないといけない。そういうことからわかるように、人間の脳は直立歩行の過程で非常に他の動物に比べて進歩を上げてきたということですね。今配りました資料の2の所にチンパンジーと現代人の顔と脳の比率が書いてありますが、チンパンジーの場合は非常にあごが発達していて顔に比べて脳の容積がかなり小さい。だいたい1対4くらいであるといわれています。それに対して現代人は顔と脳の部分が同じ位、1対1の割合になっています。つまり頭の中で脳の占める部分が大きくなっているということがわかります。また他の動物と脳そのものの重さと比較するとたとえば最も人間に近い動物だといわれているゴリラの場合で約500g、それに対して人間の場合は普通の大人でだいたい1500gぐらいだといわれています。

このように、人間が他の動物とちがって優長であるといわれるくらいまで優れた能力をもつことができるようになった最も根本的な原因は、直立歩行ができることによって手の機能が非常に高度に分化してきたこと、ただ自由に使えるだけでなく親指が重要な役割を果たすようになってきたと同時に、視点の高き視野の広さも獲得することができたということです。さらには脳が非常に発達するようになってきた。これら3つのことがさらにお互いに影響を及ぼしあいながら、手が複雑になればなるほど脳もそれに指令を送らなければならないのでいっそうしくみが高度になっていく。えものをすばやく捕えるためには手をもっと器用に使うなければならない、そういうふうにして体の特徴が他の動物にはない形でどんどん発達してきたということです。つきにそれでは、こういう体の特徴を基礎にしてさらに高度な文化や能力を身につけることができるようになるわけですが、それが一体どういうものであるかということですね。はじめにみんなが言ってくれたように、だいたい大きくわけて第1は火をつかうこと、第2は道具を造ったり使ったりすることができるといふこと、第3は言葉や文字を使うことができること、人間の能力というのは非常に複雑で高度であるので、もっといろんなことをあげることができそうですが、一応中心的な要素はこの3つであると考えられます。それで今度はこれらの

文化的な特色とさらにそこから出てきた高度な能力が、人間にどのような利益をもたらしたかといふと、まず第1に人間が火をみつめてそれを利用することによってどういう利益を得ましたか。

- P14 たとえば夜など、その頃では狼のようなものが多いと思いますが、これらの動物は火を恐れてよってこないし、火を使って料理をして肉などを焼いて食べられることから、人間の食生活の改善のためと自分の身体の防備のために使われたのではありませんか。
- T15 他の動物は火を恐れるから火のそばには近づかない。だからそれを使っていると人間は安全なわけです。もうひとつは料理に使うことによっておいしく食べることができるし、長く保存することができる。それからその他に、火の発見は生活にどんな利益をもたらしましたか。
- P15 火で料理して食べるということは、生肉を食べるのはちがって、発達していたあごをだんだん退化させ言葉を使えるしくみに口の構造が変わってきたということの前に聞いたことがあるのですが、だから食物の変化によって言葉を使えるようになったということ。
- T16 その他にどうですか。
- P16 火を使うということは、寒いときに自分の体を暖めたりして保温にも役立っている。
- T17 暖をとるといいますか寒さから人間の命を守るということ、人間の祖先はきびしい寒さの氷河時代をマンモスなどと一緒に生きのびてきた数少ない動物で、火を近くで燃やすことによってマンモスの毛皮にかわる暖房を火からえることができたということです。その後の人他に。
- P17 はい。暖房と思っていたのではわかりません。
- T18 もうひとつは明かりの役割を果たすということ。今の蛍光灯と同じように夜を明るく照らしてくれる。そのために、動物は普通夜目が見えませんが、人間は夜も活動することができ。行動の時間帯が拡大されるという利点がある。それからつきに、道具というものはどういう利益をもたらしたのでしょうか。そのつぎの人。
- P18 よくわからないんですけど、やっぱり道具がなかったところは食べものなどをとるのもみんな手でとるしかなかったが、道具ができると魚などもやりとることができるし、その他の自分の食物をとるためにも道具を使うことができる。つまり自分の体を守るために使ったり食物をとるために使うことができる。
- T19 ハイ、それでは今配りました資料の裏側を見て下さい。そこに「道具の発明—人間を万能ならしめたもの」というのがありますね。ここをその後の人読んで下さい。
- P19 資料を読む。
- T20 この資料から、人間にとって道具はどういう働きをしていますか。その右どりの人。
- P20 身を守るということそれから生活を向上させるということ。
- T21 基本的には道具の役割というのは、人間の手の機能や足の機能を代行してくれるということですね。しかもそれが人間の力以上の働きを効率的にやってくれる。アルマジロのよういかいボイノシのきばの代わりにつるはしといったようなもの、動物のつめのわりにやりや石のものがたつようなものを使うことができる。そうすることによって人間の体も持っている力を飛躍的に拡大することができる、そういう役割をもっている。それからさらにもうひとつの言葉の使用ということも、こういう火を使ったり道具を使ったりするいろいろな人間の経験を他の人達に伝えていく、現在だけでなく未来の人々に伝えることもできるしまた現在の人は過去から学ぶこともできるということです。こういう人間の身体的特徴をいかして獲得できる他の動物にはない高度な能力を、さっきだれかがいってくれたように「文化」と呼んでいる。特に3つの要素は、どんな場所のどんな人間でも必ずやっていたことだという点で、またどんな古い時代の人間でもやっていたという点で、「原始文化の3形態」とよんでいます。結局文化というものが他の動物とちがって人間独自の能力を発達させるために非常に役立っているということですね。これらから人間にとって文化とはどう価値があるといえますか。その前の人。
- P21 やっぱり文化というものは、人間がそれをつくりだすことによってそれを自分達の生活の向上のために役立てることができるし、人間の成長する過程というものを表わしていくような役目があります。
- T22 今ひじょうに重要なことをいってくれたわけですが、資料の5のところを開けて下さい。ここをその前の人読んでください。
- P22 資料「文化」を読む。
- T23 ここにも書いてありますように、他の動物は自然環境に対して自分の体で直接に対応していかなければならない、自分の体しかたよるものがない。ところが人間の場合はたとえばこの絵に書いてあるように、自分の体以外に着物にあたるようなものを用いるいろいろな作り出して、こういうものを通して自然環境に働きかけていくことができるということですね。この着物にあたるのが文化であるということ。人間

はこの文化を獲得しいろんな人達に伝え共有することによって生活をおどろくほど豊かにしてきたということ、ある意味では恵まれない人間の体をカバーするものになったとすることができるわけです。ここでもう一度、前の時間にやった動物の本能的行動と今日やった人間の文化的能力とを比較して火に入る夏の虫というのがありますが、動物の方がひじょうにすばらしい本能的行動様式をもっている、生命力というか生きていく力が非常に強いということをやったわけですが、果して本当にそうなのであるかということです。今度はプリントの6の所に「飛んで火に入る夏の虫」というのがありますが、動物の本能的行動と今学習してきた人間の文化的能力とではどういうちがいがあるかということです。その前の人読んでください。

P23 資料「飛んで火に入る夏の虫」を読む。

T24 ここには月見草のようなものから夜みつをすうために身につけている昆虫の本能が、月見草ではなくて昆虫を飼うために人間がしかけたワナであっても、同じように飛んでいて死んでしまうそういうことが書いてあります。このことから前に時間に言った動物の本能的行動にはひとつの限界があるといえると思いますがどういう限界でしょうか、その前の人。

P24 動物ではなくてこの場合は昆虫ですけど、昆虫というのは明るいものに飛んでいくという本能があるけれども、明るいものがどういふものかを見分けることができなくて、明るければ何でも飛んでいく。

T25 つまり月見草か電燈かという見分ける昆虫にはできないということですね。それを自然環境とのかかわりという点からみるとどういふことがいえますか。もう少し今のことをいうとどうですか。その前の人

P25 昆虫はものを見分ける力がないし、人間よりも知能が低いからやっぱり電燈の灯に飛びこんでいってしまう。

T26 つまり、本能的な行動様式の限界、問題点はどういふことかということ、今言ってくれたことなんですけど、もう少し一般的な言い方をしますと、本能は自然環境がいつも同じなら非常にすばらしい力を発揮することができると、いったん自然環境が変わってしまうと全然役に立たず逆に害にさえなってしまうということです。人間以外の動物の本能的行動というのは、その動物の住んでいる自然環境に制約されている、縛られてしまっている。もしそれが変わるともうつかない。自分の方から行動を変えていくということがもうできないということですね。それに対して人間は環境が変わってもそれに適切に対処していくことができる、つまり自分自身の行動を修正していくことができるということです。たとえば火の場合、昆虫や動物はただ一方的に飛びこんでいったり恐れて近よらなかつたりするのですが、人間はそれを見て確かに熱くて危険だけれども、これは寒いときに役立つとか肉を料理するのに使えるとかたまたまわかるだけでなく積極的にそれに働きかけ利用していくことができる。このように人間の文化的行動様式は、動物の本能とはちがって自然環境に適合していくことができるだけでなく、さらに自然環境を自分の生活に都合のよいように作りかえていくことができるということです。このことから人間というものは他の動物とちがって、逆に自然環境を支配していくことができる。自由に利用していくことができる。そういうすばらしい力を獲得することができた。ここに人間が「万物の霊長」と呼ばれている大きな原因があるわけで、他の動物には見られない歴史的発展をとげることが可能となった理由があるわけです。今日の時間は、前の時間にやった人間の弱さというものに対して逆に、人間というものは非常に強い能力をもちうるものであって、それをうまれてから後天的に習得することができるということ、これをみんなに理解してもらいたかったわけです。

第3時 授業者 曾田満子 3年1組 昭和52年7月1日

T1 この前の時間はですね、人間についてどういふすばらしさがあるかという事を肉体的体つきの面と、そこから出てくる文化的な高次元な能力について、だいたいみんな知っていたとは思いますが、もう一度しっかりした証拠や事実をふまえて考えてみたわけですが、だれかどういふ事がわかったかということを書いてきてくれましたか。1人2人の人に読んでほしい。はい、どうですか。

P1 かなり簡単ですけど。

T2 はい、いいです。

P2 人間はたしかにうまれたときはどうしようもない体や頭でも、大きくなるにつれてずっと他の動物より優れたものになってくる。

T3 はい、その隣の人、君どうですか。

P3 人間はうまれた時には親に大切に育てられるから、ひ弱けれども最終的には頭脳だけが発達してきて、自分たちを開発することができる。しかしさるはそれと比べてうまれた時は、親から離れて自分で生きを見つけないならならぬから、人間の赤ちゃんより発達しているが、いずれは人間の方が知恵がついてきて、さるよりうまわって行くから、人間の方がすばらしい。

T4 はいどうも。今二人の人が読んでくれましたが、この前の時間に言いたかったことは、人間がもつてうまれた弱さというものは、もう少し長い目で見ると実は非常に大きな可能性をひめたものであり、強さによっていく要素を含んでいるという事。それは、2本足で直立することができるという人間独特の体つきからはじまって、手を自由に使いそして発達した脳で言葉、道具を使って高度な生活ができるようになる。そしてそれは、うまれた段階では人間より高度な本能的能力をもっていた昆虫なんかが、はるかによばない強い力になっていく。その例として、飛んで火に入る夏の虫という非常に強い本能だけれども、環境が変わってもそれに適応しきれないで自分から命を断ってしまうという、昆虫のやかない性格を学習したのですが、それに対して人間は、発達した脳で環境が変わったということをはやく早く察知して、それに対応できるだけの自分の行動を新たに作り出していくことができる。また環境そのものを変えていくことができる。人間はそういうすばらしい能力をうまれてからしばらくの成長期間の中で身につけていくことができるんだということを前の時間には言いたかったのです。

今日の時間は、さらにもうひとつ見方を進めて、確かにそういうすばらしい能力を身につけていくことができる人間だけれども、はたして人間がうまれたままの状態ではっておかれたら、本当に健全な形でこういう人間のすばらしい能力というものが発達していくかどうか、そこを今日は考えてみたい。その点についてみんなの意見を聞かせてほしいのどうですか。岩橋くん。

P4 人間が放置された場合は、赤ちゃんだったら何もできないから死んでしまう。他の動物の場合だったら生きていける可能性もあるわけだけれど。

T5 まあひとつは確かに、人間は本能的行動ができないから自分でえさをさがすことができないで死んでしまう。それはひとつ言える事と思うんですけど、今日考えてほしいのは命がなくなってしまう事は別の事で、それはちゃんと置いておいて、命がずっと続くうとして、人間が成長していきと本当にちゃんとこの前の時間に習ったような人間だけがもちうる能力を身につけていく事ができるかどうかということなんです。それじゃ木村君どうですか。

P5 やっぱりまわりからの影響があると思う。それで赤ん坊が人間らしく成長するためには、母親とか周りの環境から言葉や道具の使い方を教えてもらう必要がある。

T6 まわりの人から教えてもらわないとうまく成長できない。なんかそういう具体例を知っていますが、今木村君。

P6 あまりよくわからないのですが、さる少年というか野生のきんに育てられた少年がみつかった、人間らしい生活をさせようとしてもうまくいかない。野性に帰ったというか……。

T7 人間が野性に帰ってしまったということですか。

P7 それで最終的にはにもどれない。そしてなんにも人間らしい生活はできない。

T8 なるほど、今具体的な例まで示してくれましたが、実は今日はですね、そういうことをもうすこしくわしくみてみようと思うんです。人間がもし生まれながらにして人間の中で育つことができなかった場合、いったいどういふふうになっていくかということ。本当に人間らしく成長していくことができるのかどうかということですね。とよとまたスライドを見ますから暗幕を始めてください。

えーっと、これはですね、今から約50年ほど前にインドのカルカットの南方のゴタムリという村で2のおおかみに育てられた少女がみつかったときの記録写真です。これを見つけたのはシグ牧師という教会の伝道師で、見つかったとき年齢はあまりはつきりしませんでした。だいたい1才半と8才くらいでした。その後アマラとカマラという名前をつけられて孤児院でくらすようになるわけですが、妹のアマラは1年たたないうちに死んでしまいます。姉さんのカマラの方は9年間くらい生活して17才まで生きるんですね。そして最後に尿毒症という病気のために死んでしまうんです。(スライド1)この写真はまだ孤児院に連れられてきて間もない頃で、夜になるとどういふように扉の穴からですね、外の様子をうかがうということ。夜というより夕方ですね。夕方のひじょうにきれいな夕やけ、そういう景色がすごく好きで、そういう景色になってくると何となく体がソワソワしてきて、外に出ていこうかなという感じがするからさるのぞくしきをしたそうなんです。(スライド2)それからこれは食事の様子ですが、こういうふうに両手をつけてですね、手を全く使わないで直接口で食器から食べていますね。両手がぜんぜん使えない例です。(スライド3)これは草むらでにわとりが死んでいるのを見つけて、その内臓を食べている様子です。これはまたあとで詳しく資料を見ていきませうけれど、非常に速く死んでいくにわとりにおいをのぞく鋭い鼻でかきつけてですね、走って行ってどういふように内臓をたべているわけですね。(スライド4)それからこれは、だいたい人間の生活に慣

れてきてシング牧師の手からバスケットをもらっているところですが、これも手を使わないで口でとっていますね。まあこのようになんか人間になじめるようになってきた頃の写真です。(スライド5)これは木にのぼっている様子ですね。(スライド6)それからこれは眠っている写真です。人間だとこんなに重なりあってねるととても気が悪くてがまんできないけれど、この2人はねるときはいつもこんなふうに重なってねたそうです。確かに犬の子なんか体を寄せあうとかがえて安心してねむるといことがありますが、そういうところは全くよく似ていますね。(スライド7)これはようやく両足で立てるようになった時、初めて立った時の写真です。だいたい3年くらいしてやっと両足で立てるようになりました。(スライド8)これはもう服なんかを着て、かなり人間の生活になじんできた頃の写真です。これで終了です、また幕をあげてください。

(資料を配布する)資料が2枚ありますか。今スライドで見たのですが、スライドだけではあまり事実が詳しくわかりませんので、今度はこの資料ですこしみていきます。それではまず、この2人がつかまった時の様子をちょっと読んでください。坂下さん。

- P8 「つかまったときの様子」を読む。
- T9 はい、そこまでいいです。ここでは、とらえるときにふつうのおかみよりも人間の子どもの方がはるかにおそろしい形相をして、非常に狂暴であった。それを布をかぶせてとらえたといったようなことが書かれています。それからつぎのつかまった当時のこの子達の身体的な特徴を読んでください。若槻君。
- P9 「身体的な特徴」を読む。
- T10 はい、そこまでいいです。それでは小川君、次に目のところを読んでください。
- P10 資料を読む。
- T11 はい、それではその次、暗やみでの視覚というところ。
- P11 資料を読む。
- T12 はい、それからですね、ちょっととばして興奮というところ。
- P12 資料を読む。
- T13 はい、耳と聴覚のところ。
- P13 資料を読む。
- T14 それからもう少し、裏側の食べ方のところ。竹下君。
- P14 資料を読む。
- T15 はい、それから寒さ暑さの感覚のところ。
- P15 資料を読む。
- T16 はい、どうも。ここまででかなりわしく当時のこの子たちの様子が書かれているんですけども、前の時間に学習した人間独自の肉体的特徴というものがこの2人の女の子の場合にはどのような形で現われているか。むしろまあ動物に近い形で現われているのですが、どういふ点が動物に近いと思ったか。ちょっと何人かの人、これを読んだ感想をまじえて発表してください。岡さん。
- P16 えっと、もう読むことみんなすいでいいとかおどろいているんですけど、夜になるとよく見るとか、非常に興奮すること、鼻がよくきくとか、食べ方もぜんぜん手をつかないところなんか、本当の動物みたいで、暑さ寒さの感覚もなく人間とは考えられないような事をしているので非常におどろいています。
- T17 はい、まあ非常に迫力がありますね。人間も環境によってこれほどまで変わるのかとおどろかされるのですが、その中でも今言ってくれたように、夜中になると目が青色にざらざら光る独特の光線を発するようになるというのは、ふつうの人間の場合は絶対考えられないのですが、住む環境によっては、非常に動物に近いような特色が人間でも現われてくる。まあもっともおどろくべき例のひとつだと思います。それからもう1人、原君。
- P17 もうまれた時は人間らしい体をしていたと思うんですけども、やっぱり環境によって人間も野性にもどるといふか、環境が一番動物にとっていろんな変化をもたらす重要な要素であるということ。
- T18 なるほどね、そういう事をちょっと次に聞こうと思ったんだけど、まあそういう事で非常に動物に近かったといふことがわかると思います。特にカマラという女の子の場合は8年間生きていたわけなんですけど、それ以後どういふふうに変化していったかという事なんですけど、それについてひとつだけ例をあげておきたいと思うんですけど、もうひとつの資料の知性、理解力がどういふふうに進歩したかというところをみてみましょう。佐藤さん、読んでください。
- P18 「知性(理解力)の発達」を読む。
- T19 はい、ここまでいいです。結局この子達はどういふふうに変化していったかというところ、さっきの写真でも見ましたように、3年ほどして立てるようになった、そして手をつかっちゃんとお食べるようになりました。それから4、5年して、喜び悲しみという自分の心の動きを表現するようになり、そして死ぬまでに言葉はどれくらいしゃべれるようになったかといふと、非常に簡単な単語のようなものを45

しか使うことができなかつたということです。そして知性が発達したといっても、色を見分けるようになったとか、人の名前でうなづいたり首をふったりするようになる程度で、結局3才半ぐらいの子と同じ程度の知能までしか発達しなかつたといわれています。こういうところから、今日みんなに聞きたいことは、人間にとって前の時間に示したような人間独自の体の特色は、本当はおおかみに育てられた少女の場合もふつうの人間の場合も基本的には同じはずなんですけど、現われ方が全くちがう、もちろん文化的行動様式はぜんぜん身につけていない。そういう点で、人間が健全な形で本当に人間の能力を身につけていくためにはどういふ環境が必要なんだろうかとことを考えてほしいのです。さっきの人も言ってくれましたが、もう少し他の人にも聞いてみよう。えーと、佐藤さんどうですか。

- P19 この子達はやっぱり今まで他の人間に接する機会というものがなかったからだと思います。だから動物みたいな生活をするようになった。けれど知性の発達のところを読んでみると、そんな野性的な生活をしている人でも、人間の中で生活していれば時間がたてば、少しずつ人間に近づいていくということがあると思う。そういうところからみると、今まで眠っていた人間のなものが生きかえるためには環境というものが大切なんだと思う。
- T20 なるほど、今ひとつ大切なことを言ってくれました。特に後の方で言ってくれた事なんですけど、今までは人間のこういう能力が眠っていたのではないかと。それが人間的な環境で生活することによって、少しずつではあるけれども現れてきたのではないかと。だから、もっと長く生きていけばもっと人間らしくなっていたかもしれないといったようなことですね。この人達がもっと長く生きていけばどこまで人間になりきることができたらどうかという事についても考えてほしいんですけど、今たずねているのは、社会的な環境とのかかわりでどういふことがいえるかという事です。だれか他の人、手を上げてでもいいんですが西尾君。
- P20 さっき言われたのですが、人間というものは、まわりの環境に影響されて生きていくものだと思う。まわりの環境が動物であれば動物のように生きていくし、人間ならば人間のように生きていく。他の動物のように生まれながらの本能をもっていないので、少しはもっていると思うんだけど、人間としての成長は、人間の中で生きていかなければ出てこないと思う。社会的ってどういふことかはっきりわからないんですが、やはり人間の中であってという特徴は現われてこない
- T21 はい、直立できるとか、両手を自由に使える、また親指をうまく使って細かな作業をすることができるといふような肉体的な人間独自の特色、そういうものですが、人間の中で生活していないとぜんぜん生きてこないといふことも、人間としての能力をもつことができなかつたということです。逆に人間の場合は、他の動物以上に学習能力といふか環境にあわせて行動を作っていく力が強いので、むしろ他の動物の場合なんかよりもずっとすばらしいといふか、ふつうの動物以上に動物的なものになっていく可能性さえあるということですね。
- そういう意味で、人間が本当に人間らしい高度な生活を行なうことが可能になったといふこと、そのための力を身につけることができたということは、やはり人間が適切な社会環境の中で他の人間の影響を受け、知らず知らずのうちに人間としての行動様式を習得してきたからだとすることができそうです。つまり人間の成長にとっては、社会的環境といふか社会的刺激、そういうものがなくてはならないものだと思います。もしそれがなかったら、いかに素質が優れているといふことも、全く他の動物と同じように野性化してしまうということがわかるとも思います。それからもうひとつ、さっき佐藤さんが言ってくれましたが、この子達が17才で死んでしまわずに、せめて30才でも40才でも生きていたならば、はたしてふつうの人間と同じようになりえたかどうかということですね。ちょっとみんなの意見を聞いてみたいんですが、佐川君どうですか。
- P21 えーと、17才まで生きたということですけど、一応この17才までの段階では、たいぶ理解力というふうなものができて、だんだんと人間の生活に慣れてきたといふところまでいって死んでしまったんですけど、もしこれから20年か25年か生きたとしても、ぼくは、完全には人間の生活にもどることができなかつたと思います。
- T22 なるほど、ある程度までは人間らしくなるけれども、完全にふつうの人間と同じようなところまではいかないんじゃないかということですね。まあ、これは実際生きていなかったわけですから推測する以外にないんですけど、そういうことはできないということですね。それはどういふんですか、さらに理由。
- P22 やっぱり動物でも人間でも、自分が小さい頃に覚えたりに身につけたりしたようなことは、それからもうずっと自分の中で成長していく、このカマラとアマラの場合は、8才のときに見つかったといわれますが、それまでずっと動物の環境の中で生きてきたのだから、やっぱり動物の性質がいつまでも残るのではないかと思います。

T23 うん、なるほどね。たれか他にありませんか。いろんな人に言ってもらいたいでいいけども、ちょっと時間の関係もありますので……。

今言ってくれたように、やはり2才とか3才、4才、そういう頃に身に付けてしまった行動様式というのは、それ以後どれだけ時間をかけてもなかなか消えさってしまうものではないということ。特に2才から5才というのはひじょうにすごい学習意欲、学習能力をもっているの、その時の環境は人間を形づくるうえできわめて大きな影響をもっている。そういうことから考えると、まあそれ以後いくら長く生きていたとしても、本当に他の人間と同じようにはなりえないんじゃないかということ、そういう気がするんですね。これらのことから考えると、こういう社会的環境とか刺激というものは、人間が成長していくためになくてはならないものだということができると同時に、そういう環境も、この子達のようにあまり大きくなってしまってから与えられたのでは、もう役に立たないんで、できるだけ早い時期にそういう社会的環境の中に入れられないと人間は人間らしく育たないということができるんじゃないかということですね。それで、これまでやってきたことは、いったいわれわれにとって家族というものはどういう意義とか役割をもっているんだろうかということを考え直してみるための前提であったわけですね。それでこの3時間でやってきたようなことをよく頭に入れてあしたからは家族というものを考えていきたいと思えます。

III 授業実践の検討

1 家族についての授業前の生徒の認識

実験授業を行なう前に、1.他の動物とくらべて人間はどのような独自の特性や能力をもっていると思いますか。2.われわれにとって家族はどのような役割を果していると思いますかという問いで事前テストを行なった。これは診断的評価ともいうべきものであり、学習前の生徒の認識がどのような実態になっているかを的確に把握することによって、今後の授業を展開していくうえでどのような点に注意すればよいかを知るためのものである。人間と動物との違いについては、歴史の授業で習ったということもありかなり多くの生徒が、火を使う、言葉や文字を使う、道具を使う、知能が発達して考えていることができる、二本足で直立できる、手足が器用である、感情が豊かで細やかである、未来について考えることができる、他の動物を利用することができる、洋服を着る、発明発見をする、協力しあって生活する、自尊心や良心があるなど多様な項目をあげることができた。しかしこれらの雑多な答えの中に見られる問題点は、人間の特性を個々ばらばらに羅列するだけで、それぞれの特性を何らかの観点から互いに関連づけて統一的に説明している生徒がほとんどみられないということである。また、それぞれの特性についてどれくらい深く理解しているかという点にも疑問がもたれるような簡単な説明が多くみられた。人間独自の特性は、最も根源的には2本足による直立歩行から出発して手の機能の分化と脳の発達との相互作用を生み、これらの肉体的特色をふまえて言語や文字道具の使用といった高度な文化的能力の獲得が可能となったわけである。われわれは、これらの羅列的な生徒の認識を具体的な証拠によってうらづけられたより確かな知識へと高めていくと同時に、社会的存在としての人間の本性という観点から互いに関連づけてとらえさ

せ、さらに家族生活の意義と役割について探究するための基本的視点にしたいと考えた。

また家族の意義と役割については、やすらぎの場所、だんらんの場合、疲れをいやし緊張をほぐしてくれる、お互いが助け合う、自分の考えを生む土台、人間が生活していくために大切なもの、血のつながりのある一番身近な集団などの答えが多かった。これらの答えの特色としては、前者の場合と同じように羅列的分散的なとらえ方しかされていない、非常に一般的抽象的な言葉を使った説明が多い、家族の機能を情緒的感覚的な面からとらえており、そのために家族構成員の心情的な結びつきの強さについての指摘が大部分で、教育的機能や経済的機能、世代の再生産の機能などについての指摘がほとんど見られなかったというような点をあげることができる。日常生活の経験からのみ家族をとらえようとする際の限界がここにあらわれているといえよう。このような状況をふまえて家族の機能については、教育作用を中心にそれとの関連で心理的な結びつき、経済的活動の機能を構造的にとらえさせ、さらにそれを人間の独自性についての認識と結びつける中でもう一度家族の意義をみつめ直させ、今までは気がつかなかったいわゆるよわよわしい姿でうまれてくる人間を社会の中で自立できる強くたくましい存在につくりかえていく場としての家族の意義に気づかせることを、本小単元の究極的なねらいとすることにしたわけである。

2 授業後における生徒の認識の変容

6時間の授業が終了した後、1.人間は他の動物とくらべてどんなところがどのように違うことがわかりましたか。2.現在のあなたにとって家族とはどういうものだと思いますか、特に最初の3時間の授業で学習したことなどをふまえて書いて下さい。3.イスラエルのキブツでは親が子どもを育てるのではなく国や共同体がやとった保母さんが育てていますが、こういう形の子どものしつけをどう思いますか、うまくいくかいかないかまたそう考える理由も書いて下さい。4.「人間社会と家族」の6時間の授業について感想を自由に述べて下さいという問いで事後テストを行なった。つぎにいく人かの生徒の事前と事後のテスト結果を比較するなかで、授業による認識の変容について見ていくことにしたい。

多久和哲 事前→事後

1.人間と動物のちがい

つぎの3つのことが昔から人間が発展してきた理由である。
 道具が使える } この3つ
 火を使う } がもとに
 言葉を使う } なって現代の社会
 まで発展した。

人間は他の動物のもっている本能とはちがって新しいものを生み出す能力をもっていて、脳が発達し手が使える（物をつかめる）ことから、火を発見して料理を覚えたり道具を発明したりした。またそういうことから、知性と学習をとおして人間だけの文化というものを作り上げることができた

2.家族とは何か

まとまりのわくを考えるとまず自分の上には家族というわくがある。よって自分の考えを家族で話したりして自分が生きていく上でとても大切なものである。

毎日の生活は家庭を単位として営まれていることから、家族は日常の経済生活の単位であり、また身心に休養を与えるしお互いに助けあって生活していかなければならない。それに子どもを教育する場でもあり、もっとも基礎的な集団である。

物と違っている点だと思う。

深貝由子 事前→事後

1.人間と動物のちがい

火、言葉、道具を使う。考える事ができる。感情が細かい。文明をもつ。芸術がある。知能が発達している。創造性がある。進歩する。

本能をぐくわずかしかもたず、まわりの環境によって進歩していく。だから環境によっては狼のようになる。文化によって他の動物にはない強い力と限りない可能性をもつ。ひとりでは生きていけないが、家族、社会などの集団の中で生活しどんどん進歩していく。

2.家族とは何か

互にくつろぐ場
 生活で協力する
 精神的つながり
 休養
 人間としての互いの進歩

家族によって何もできない赤ん坊からここまで育てられてきた。またこれからはいろいろと学んでいく。社会的なしつけ基本的なルールなどを学ぶ場での互いの愛情で強く結びつきあっている。収入などで助けてもらっており、ひとりの人間が成長していく上でかけがいのない大きな役割をもつ。

佐川俊文 事前→事後

1.人間と動物のちがい

まず人間は自分1人では生きていくことができず互いに関係しながら生活している。集団の中で自分の能力を十分発揮することによって社会を作っている。

人間はうまれた時は大変弱い生き物であるが、他の動物（さるなど）の持っている生きようとする力（本能）の代わりに頭脳の発達で現在の姿があるのだと思う。人間は火を使うことにより寒い冬に耐え、暗い夜を自分のものにし、言葉を使うことによって互いに協力しあった。そして道具を発見しそれをうまく使いこなしていることが他の動

2.家族とは何か

家族はたがいに助け合い協力して生活していく上で必要なものであり、仕事などを終った後、生活に楽しさとゆとりを与えてくれる。

家族は生計をたてるという面でも、互いに協力しあって生活していく面でも人間にとってなくてはならない集団だと思う。また人間が育っていく上で、親の愛情や家庭の雰囲気など自分を取りまく環境が大きな影響を与えるので、家族という集団はなくてはならないものと思った。人間は環境によっては動物にもなりかねない。

田中裕子 事前→事後

1.人間と動物のちがい

- 言葉を使う・道具を使う・歩くことができる・頭で考えることができる
- 手と足が使える・指が動く・字が書ける・感情理性などを表現できる。

人間は動物とちがって二本足で歩く。だから両手を使えるようになって道具やその他いろいろ便利に進化していった。それに人間は脳が大きいので言葉やなんかいろいろ使えるようになった。例えば子どもの育て方にしても、人間は言葉や両手を使っているんな事を教えるので、心が結びあがりしつけがうまくいったりしているけれど、さる

2.家族とは何か

- 心の安らぎ
- 生きていくための仲間
- 人間として生きていく所
- ストレス解消に役立つ人々
- 心がそのまま表現できる一信頼

心の安らぎだと思ふし、今のように文字や言葉を知っているのも両足で歩くことができるのも家族がいたからで、もし家族がいなかったらさるみたいになってしまうかそのどちらかだと思う。家族は愛情をもってしつけからなにか一人前になって独立していくまで大切に人間を成長させてくれる。そしていっしょに成長していく仲間

など他の動物は言葉もなんにもないからほっぽりだして育てる。赤ちゃんの時はさるのほうが強いし丈夫だし早く独立するけれども、いつまでたっても赤ちゃんの時と能力がたいしてかわらないことからわかると思う。

だと思う。さるのようにその日のえさはその日にとるみたいな生活ではなくて、ちゃんと父親が働いて生活が安定しているということは、家族とは経済的な面でも協力している集団であると思う。

ここに典型的な事例として示した4名の生徒の授業前から授業後への認識の変容は、基本的には他の生徒にもほぼ共通しているということができる。そこにみられるひとつの特徴は、授業後には授業前よりも新しい視点、より多くの視点から人間や家族の特性について考えることができるようになってきているということである。この傾向は、家族とは何かについての答えにより明確にあらわれている。多久和くんは、授業前はかなり表面的で家族の機能についてほとんど何ひとつ指摘することができていないが、授業後には経済的単位、くつろぎの場、教育的作用という3つの観点から家族の機能を説明することができるようになってきている。佐川くんもいこの場ということの外に、授業後には経済的側面からも家族の機能を説明することができるようになってきている。同じく深貝さんと田中さんも、授業前はやすらぎの場としてしか家族をとらえることができなかったのが授業後には社会的なしつけの場、経済的に協力しあって生活していく場としてもとらえることができるようになってきている。

もうひとつの特徴は、授業前には人間と動物のちがいや家族とは何かという問いに対してきわめて羅列的分散的にしか答えていなかったのが、授業後にはそれらをかなり論理的に関連づけてとらえることができるようになってきているということである。これは深貝さんと田中さんの場合にきわめて顕著にあらわれている。両者とも事前テストでは箇条書きの形でしか答えていないが、事後テストでは長い文章で説明している。これは決して教師が指示したわけではなく、授業後にそれだけ書きたい内容がうまれてきたためである。内容的にも深貝さんは、授業前は人間の知的側面についての特性を羅列しているだけであるが、授業後にはそれらを関連づけて、本能に拘束されない環境への適応力の大ききつまりは社会生活の中での文化的能力の獲得としてとらえ直し、ここに他の動物にはない人間独自の限りない進歩の可能性がうまれることを指摘している。田中さんも、事前では思いつきをむぞうさにただ数だけやたらと多くならべたてたにすぎなかったのが、事後では直立歩行という最も根本的な人間の肉体的特性からはじめて手の発達による道具の作製、脳の発達による言葉の使用、そこから可能となる高度な育児の様式という形で、人間の特性をかなり体系的

にとらえることができるようになってきている。

さらにもうひとつの特徴は、授業前においてすでに人間の特性についてある程度進んだ理解をもっていた生徒も、授業後にはさらにその内容を質的に深めることができているということである。多久和くんは人間と動物のちがいを最初は火と言葉と道具を使うという文化的能力の面だけからとらえていたが、授業後にはそれを本能的行動様式にだけしぼられないで手と脳の発達という人間独自の特性を活用して新しい行動様式を後天的な学習によってつくりだすことができるからであるというように、その前提となっている肉体的特色をもふまえて説明するところまで到達している。また佐川くんの場合は、最初から人間は集団の中でのみ自分の能力を十分に発揮することのできる社会的存在であるというかなり抽象度の高い理解を示していたが、授業後には、その社会性についての認識を人間のうまれつきのひ弱さとそれをカバーするための火や言葉といった文化的武器の共有の必要性という形で、一層その理解内容を幅のあるものにしていくことができる。

ここに示した授業前と授業後のテスト結果の比較はきわめて限られた数のものであり、けっしてこれをもってすべての生徒の認識の変容を把握しているということはないが、一応今回の一連の授業は、他の動物にはない人間独自の特性という観点をふまえてあらためてわれわれにとって家族とは何かを問い直し、これまでに生徒が日常生活の中で獲得していた家族生活についての常識的な認識を一步前進させるという、初期の目標をある程度達成することができたということができるように思われる。

3 授業についての生徒の感想

われわれが今回の実験授業で意図していたことのひとつは、比較種族的・比較文化的な内容構成と概念探究学習の論理にもとづいた授業展開という2つの内容構成原理が、現実の授業実践の場面での程度の有効性を発揮しうるかを検証してみるということであった。前にも述べた通りこれら2つの考え方は現在のアメリカ新社会科の中で大きな注目を集めている内容構成理論であり、これがはたしているような点で条件の異なるわが国の児童生徒にどの程度適用することができるかを知ることは、今後の社会科の教科課程のあり方を考えていく上でもきわめて重要な課題である。そこで以下では、これらの点についての授業後の生徒の感想について見ていくことにしたい。まず比較種族的・比較文化的な内容構成に関する感想としてつぎのようなものをあげるることができる。

ア 比較文化的な内容構成について

・私は今までこんなにしんげんに家族について考えたことがありませんでした。今自分の家族を見てみるとな

- んか今までとちがったような考え(親は愛情と信頼を子に注ぐ)になっていて、てるような気がした。ただ親は子を育てる義務があると当然のように私は思っていました。もっと家族というものは人間にとってなくてはならないものだと思う(精神的にも)。(女)
- 当初は、社会科の授業なのに進化論のようなことをやったりしてずいぶんおかしきことをするなと思っていた。しかし3時間くらいやるうちに、だんだんと大学の先生のやられることがわかってきた。少々むずかしかったが実に興味のある授業だった。またあらためて親のありがたさを痛感した。(男)
 - 今まで家庭家族について深く考えていなくて、授業を受けてこんなこともあるのか、こんなこともあるのかともう一度思い知らされたり、日本の家庭が他の国にくらべておとっているように見えたり、一時間一時間おどろいたりしていました。また狼に育てられたアマラとカマラの話を読んでみて、人間というのは小さい頃環境によって変化していくものなんだなと感したりした。この6時間の授業で他の人の家族と比べることもできたしよかったと思った。(男)
 - 授業に入る前は、どうせわかっていることをやるのだからつまらないと思いがちでしたが、案外わかっている所がありました。とても勉強になったと思います。特に狼少女の所が印象に残りました。(女)
 - 「家族」というものを非常に深く追求したので、非常に深みがあってよかったと思う。しかし、理解しにくい面も年齢のせいかなかなりあった。が家族というものを見つめながら「自分」というものの認識も同時にできた気がする。(男)
 - 私の家は3人家族で他の家とくらべて教育などに関してはきびしい方で、私はあんな家族は本当の家族ではないと思う時があります。がこの授業を受けた時、家族の重要性をあらためて思いしらされました。家庭がどんなにきびしくてもだんらんがあれば、子どもはいい方向に育っていき明るい子どもになると書いてありました。家族というのはやさしいことだけではなく、きびしさもいるということがよくわかりました。(女)
 - 私は父が家に給料を入れてくれることをあたりまえだと思っていましたし彼らが私に教育するのもあたりまえだと思っていました。ところが今授業を終わってみてもし彼らが私に対して何の教育もしなかったらと思うと大変、親のありがたさがわかりました。家族とは大切なものだとはんとうにわかりました。(女)
 - 文化という生物の生活でもっとも高度な要素をバックアップとし、からだはひん弱であっても頭をつかい家族という集団を形成して生きている。人間をすばらしいものと思ひ、不思議にそして神秘と思う。(男)
 - 人間における家族の重要性がわかった。疑問・カマラ

やアマラがもっと長生きをしていても本当に人間そのものになれなかったのだろうか。もともと人間なんだし、赤ん坊と同じでまわりの環境しだいで何とかなったのではなかろうか。8年のブランクをなくせるのではなかろうか。もともとまわりの環境に順応できる生物だから人間らしくなれたと思うが。(男)

これらの感想文からもわかるように、多くの生徒が他の動物や他の文化と比較・対照するなかで自分自身の家族の意義を再認識している。特に狼に育てられた少女たちとの比較やエスキモーの生活との比較が印象に残ったようである。また外国の家庭のしつけと比較するなかできびしさの必要性を理解できた生徒もいた。すべての教材にこのような比較学習が万能性を発揮することができるかどうかは別問題として、公民的分野の導入單元である家庭生活の学習ではきわめて効果的であるということができるように思われる。

イ 概念探究学習について

また概念探究学習に関する指摘をしている感想文としてはつぎのようなものをあげることができる。

- たくさんの資料と説明により、かなり深く具体的な勉強ができてよかったと思う。教科書だけではなく、他の資料によって深く理解する勉強方法も楽しいものだと思う。(女)
- 初めの3時間はなんでこんなことをやるのかと思っていた。しかし今になってみると、あれほどの資料がとても役立ったと思う。もう少しわれわれ自身の家族について考えてみてもよかったと思う。(男)
- 「人間社会と家族生活」のところで「人間社会」の方はよくわかりましたが「家族生活」の方はわかりにくいところもありました。それは、黒板にあまり書いてくれなかったので先生のいわれることがノートにうつしきれなかったからです。プリントやスライドなどで楽しく授業ができたと思いました。(女)
- 先生の授業はとても専門的で、一つのことにとても深くはいつてよかったと思います。プリントが多くわかりやすい授業でした。(男)
- 資料などがおもしろく、あらためて家族の重要性が認識できた。とくに狼少女のところがかわいそうでつくづく自分の幸福をかんじた。(女)
- すこしいくつなところもあった。しかしプリントなどの内容はおもしろかった。すごく遠まわりをしたようだが家族というものがよくわかった。(女)
- おおかみ少女のことですが、まだ何となく信じられないくらいなんですけど、だいたい人間のつくりなどみんな同じだと思いますが、夜になると目が光るとか何十メートルも先にあるにわりのにおいがわかるなど人間にはありえないことなんですけれど、やはりうまれた時からのまわりの環境でそうってしまったんだ

から、今私達はこうして生まれた時から家族の中で育ちお互いに信頼と愛情をもって生きているので幸福に思っています。(女)

- ・いろいろとたくさん資料があって読んでいるとおもしろかった。内容はわかりやすかったけれどもいつもみんな指名されて発表してばかりで、もう少し時間があればみんな自主的に発表したのではないかと思う。(女)
- ・今までの授業によっていかに家族が大切なものかということがわかった。今までこんなに家族というものが人間に必要なだということはあまり考えていなかった。ところでぼくは、この授業のはじめなぜさるの子どものことなどをやるのか不思議だったが、今になって人間とさるの家族に与える影響の違いをやっていたということがわかった。それにたくさんのプリントの中には、ぼくの興味をひくようなことがいっぱい書いてあってとても参考になった。(男)
- ・先生がひとりでしゃべって教えるのではなく半分近く僕らの意見を聞いてもらったのはいいことだと思うが、先生の言うべき答えがすでに決まっていて、こちらの意見をあまり取り上げてもらえなかったように思えた。今僕らが受けている授業では黒板にまとめて書いてもらっているが、この授業ではそれがなかったのでノートするのが非常につらかった。だけどほんとうはこの方がよくのみこめるのかもしれない。(男)
- ・もっとこちらからもしゃべれる授業がよかったような気がします。先生が違うせいかな自主的に意見を出せなかったことが大変残念であった。(女)

これらの感想文からいえることは、ひとつは資料の選択と提示が比較的効果的におこなわれたということである。資料を効果的に活用することによって単なる思考のための素材としてだけでなく、学習に対する生徒の興味関心をも飛躍的に高めることができるという考え方は、スライドを含め資料がわかりやすく授業が楽しかったという生徒の感想によって一応裏づけられているといえよう。しかし、自主的に意見がだせなかった、教師が生徒に期待している答えがすでに決まっていて、生徒の多様な意見をとりあげてもらえなかったというような指摘にもみられるように、発問の機能の効果的な利用という点では問題があるということが出来る。また、ほんとうにひとつのことに深くはいるこんでいってよかったといえるかどうか、それぞれの授業の大きな流れについて仮説と検証のくりかえしというパターンがどの程度反映されていたかをより厳密に分析してみる必要があるように思われる。

IV 今後の課題

今回の授業実践を授業者としての教師の立場から見た場合、これまでの理論的枠組だけではとらえきれない様

々な新しい問題に直面する貴重な体験となったということである。豊富な資料を限られた時間の中で使いこなすことのむづかしさを痛感させられたのもそのひとつである。資料から何を理解させるかを教師がよほど明確におさえていないと、資料の説明だけでたちまち時間が経過してしまい、説明したものを素材にしてじっくりと考えさせる場面がなくなってしまうのである。教師が資料にとらわれすぎたりたよりすぎたりしていると、資料にふりまわされて授業の焦点がぼかされてしまうことにもなりかねない。また生徒自身もまだこのような資料の利用になれていないために、せっかく資料を読んでも、事実を正確にとらえそれをふまえて討議を進めていくということがうまくできない。資料の中味とかけはなれた抽象的観念的なやりとりが多く、資料を読む際に大切な所には線をひかせるなど、資料を十分に読みこなしほんとうの意味で適切な思考の素材とすることができるよう、細かな指導が不可欠であることを強く感じた。

また発問についていえば、教師が問いかけることによってできるだけ生徒の発言をひきだそうと努力している点は生徒からも読みとれたようであるが、教師が飛び入りであったり発問の仕方に不慣れであったりして、発問の本来の効果が発揮できなかった。そして感想文でも見られたように、教師が生徒の意見を求めるのはよいがそれが機械的になりすぎ、子どもの自主的な発言をさまたげる結果にもなった。また問いに対する答えをすでにこちらで用意してしまっているために、こちらの期待に反した答えを無視することになり、あらかじめ決められた授業の流れにとらわれすぎる傾向があった。発問をする場合にも、実際の授業で生じた新しい事態に対して臨機応変に対応できるだけのゆとりと柔軟性が必要であるように思われる。さらに、発問をしても生徒からおもわしい答えがでてこないとすぐに教師自身が答えを出してしまう場面が多く、結果的にはかなり講義的な授業になってしまった。生徒からの答えをあきらめずに発問を根気強く積み重ねることによって、子どもを答えへとおいこみ答えに対する生徒の自主性をつくりだす努力が大切であるように思われる。また、発問を単に教師から生徒への一方的な問いかけとしてのみ位置づけるのではなく、生徒から教師へ、生徒から他の生徒へといったより多面的な働きかけとしてとらえる必要がある。このような横への広がりを用意的に作り出し多様な生徒の意見をぶつかりあわせるなかで、思考を質的に深めていくことも可能であろう。このような多面的配慮の不足が、授業記録にもみられるような一問一答式の傾向の強い授業となつてあらわれているといえよう。

仮説の設定とその検証のたえざるくりかえしによる授業展開という考え方についても、すでに学習指導案を作成する段階で気づいていたことであったが、ともすると

このパターンを形式的に固定化されたものとしてとらえ、授業の流れをむりやりにこの枠組にあてはめていこうとする発想におちいりがちであった。何も無いところから何か新しいものを生み出そうとする場合には、まずこうした形式を適用してみるというのもひとつの効果的な方法であるが、このパターンをあまり機械的にとらえすぎると、授業の流れを不自然でぎこちのないものにしてしまう危険性がある。直観から論理へ、事実から概念化へ、仮説からその検証へという社会科学の方法を、社会を認識する手順として子どもに習得させることは社会科学の授業として確かに重要な課題である。しかし即効性を求めるあまりこれをあまり近視眼的にとらえすぎると、無計画な思いつきだけで授業を展開するのと同様にかえって子どもの健全な思考の発達をさまたげる要因にもなりかねない。もちろん、授業展開についての一般法則を確立することは、効果的な授業を組織する上で欠くことのできない視点であるので、今後はこの仮説と検証のパターンをもう少し柔軟で多様性のあるものとしてとらえ、単に形式にあてはめるだけでなく、さらにはその形式のうちこわし、形式ののりこえをも目標において、授業展開の法則化を考えていく必要があるように思われる。

しかし今回の実験授業は、われわれの内容構成と授業展開に関する仮説を実際の授業として具体化し、そこに含まれる問題点をも含めてその有効性を検証することができたという点できわめて有意義なものであった。結論としては、比較種族的・比較文化的な内容構成はかなりの興味をもって生徒にうけとめられた反面、概念探究学習の論理については、実際の授業に即応したよりち密で体系的なものにみがきをかけていくことの必要性が明らかになったということである。今後は、時間的な不足からここには示すことができなかったが、今回の一連の授業を授業記録にもとづいてさらに詳しく授業分析し、その結果得られた理論の修正をさらに新しい別の授業に適用してみるという形で、一層きめの細かい授業論にしていきたいと考えている。

そのためにはまず、授業の大きな流れを教師と生徒が経験や資料を媒介として社会事象を客観的合理的に認識していく過程としてとらえなおし、この目標にむかってどのように授業が構造化され焦点化されていったかを批判的に実証することが大切である。さらにそのためには、教師の発問と生徒の答えからなるいくつかの授業の核が、仮説の設定とその検証という認識のメカニズムをふまえてどのような論理で展開されていったか、それをたすける他の諸要因がどのように作用したか、また作用しえなかったかを明らかにしなければならないが、これらについての検討は今後の課題としたい。

（注）

- ① 比較文化学習を内容構成の原理とした後半3時間の学習指導案および授業資料は、別の機会にあらためて掲載することとしたい。
- ② より厳密な授業分析の方法としては、岩田一彦・中川平常他著「社会科学習における概念的知識の習得に関する研究」『福井大学教育学部紀要Ⅳ 教育科学（Ⅱ）第26号』1976年 や中村哲・森谷裕二著「社会科教育における授業研究（Ⅰ）—社会科授業実践にみられる社会科教育の諸原理—」『秋田大学教育研究所研究所報第14号』昭和52年 などのすぐれた研究があり、今後はこれらを手がかりにしながらわれわれ独自の授業分析方法を確立していきたいと考えている。